

こども 教育 文化

第17号

もくじ

高校生の進路指導の難しさ―百合との関りを中心に―	石垣 耕希：1
書評「みんなで育つ」	：6
わたしの出会った子ども	：7
ひろゆきくんとたかゆきくん	：8
お前なんか教師失格だ	：9
ヤンちゃん和美奈ちゃん	：9
宮城の教育遺産 ¹⁶	：10
「教育文化」の誕生とそのねがい	：10

高校生の進路指導の難しさ

―百合との関りを中心に―

石垣 耕希

(1) はじめに

教員になって6年目、前任校4年を経て、現在の勤務校は2年目となる。今年度は昨年度からの持ち上がりで2学年の担任である。昨年はやや幼いなと感じた生徒たちも成長し、今度はこちらの言葉になかなか耳を傾けてくれないということが多い。日々「あの声のかけかたはよくなかったのではないか、もつとこうすべきではないか」と反省ばかりしている。目の前の生徒で頭がいっぱいになるなかで、ふと心を和ませ、「またがんばろう」

と力をくれるのが、卒業生からの連絡である。私にとって最初の卒業生を出したのは、一昨年の3月であった。

不思議なもので、自分の仕事が苦しくなると立ち往生しかけたときに限って、卒業生からの連絡がある。そんなときにはなつかしさとうれしさでいっぱいになり、過去の思い出が次々と蘇ってくる。そして、その時悩んだことなども想起される一方、いつも生徒が自分で進んでいく力というか、様々な心配をかんじさせながら、思っても見なかった力を発揮し、立派に力強く歩んでいる姿

に圧倒されるのである。私自身は教師という立場で、その子と共に時間を過ごしながら、あの時何をすべきだったのか、あの時こういう言い方をしたしまったけれども、もつと別な言葉がけが必要だったのではないか、などと考えさせられるのである。

今回は、卒業生の中でも特に、在学中その子の指導について非常に悩みながらも、卒業後も連絡をくれ続けている百合（仮名）との関りを中心に、記憶や手記、彼女からの手紙をもとに思い起こしてみたい。この作業は、私にとって、進路指導の難しさや生徒への関わり方など、様々なことを考えさせてくれる。

(2) 百合との出会い

私が百合の担任をしたのは、2年生と3年生である。クラスの中で目立つタイプではなく、どちらかというと静かで控えめな女子生徒であった。欠席は3年生の途中までほとんどなかった。非常に真面目で授業中は一生懸命ノートを書き、提出物も几帳面なほどにしっかりと提出してくる。成績も上位であった。休み時間や放課後はよく、好きな小説や漫画の話、世話をしている愛犬について、趣味のお菓子作りや生け花について話してきた。大学の研究のことや勉強を教えてもらった話などしてくれた。趣味や関心が合う友達、2、3人といっしょに談笑し、クッキーなど洋菓子を作っては

みんなに振舞っていた。

成績もよく、何か問題を起こすわけでもないで、特に困惑することはなかったと記憶している。だが、別室での指導のときなど、こだわりが強く、時折幼さがあり、話がしづらいなという印象があった。3年生の進路を選択する場面で、進路指導ができず、その対応に悩み続けた。

(3) 進路選択の場面で

■ 選考結果を告知する日に

3年生で私が担任したクラスの進路希望状況は、就職希望者が約半分、進学希望者が残りの半分であった。百合は就職希望であった。ただ



し、本人は積極的に就職を希望しているというのではなく、どちらかというと消極的であった。しかし、それにもかかわらず7月にある就業体験実習では、学校近くの花屋に3日間通い、熱心に働いた。もともと花が好きで、生け花が上手であったことに加えて、家族的な温かいお店で、花を仕入れるため市場にも連れて行ってもらうなど、親切にしていたことも幸いであった。巡回で私が訪問したときには、作業場で花の茎を切る作業を夢中で行っていた。

夏休みに三者面談があった。本人は就職をしたいとは言うものの、たくさんの求人がある中で、特に希望は表明されず、母親が本人に代わって求人票から本人に合いそうなものを探していた。夏休みの早い時期に候補を絞り、少しでも関心があった企業があれば、積極的に応募前見学に行くことを勧めた。

お盆明けに校内での就職選考会議を行い、生徒を登校させて、結果を伝える。その日は同時に、履歴書指導を実施するため、必ず登校しなければならぬ日である。百合は以前に自宅近くの会社の事務を選考カードに記入し提出していたため、登校すべき日であった。しかし、選考は通過していたにもかかわらず、彼女はこの日、登校しなかった。

他の生徒への結果の告知や履歴書の指導を行った後で、彼女に電話をした。そのときのことを私は次のように日記に書きなぐっていた。

8月21日(金) 就職選考会議希望していた17名はOK! と思いきや……。OKだった百合が来ない……。電話をしても案の定、なぜ来られないのか、来ないことがどういふことか、話して追及しても逆効果。「行きたくない」。失敗だったのは、こちらの忙しき、大変さばかりを強調してしまつたこと。履歴書指導、A O指導など確かに手に負えない。しかし、本人の気持ちを理解して、そこから考えていかなければいけない

電話での詳細なやりとりは忘れたが、このとき私は焦りや苛立ちのようなものを感じながら電話した。希望カードを提出したからには、学校推薦での応募になる。途中での放棄はさせられないし、何より本人の進路をなんとか切り開かなければいけない。気分で動かれてしまつては困る。そうだが、社会人たるもの、期限を守らなければならぬ。そういう覚悟をもってもらわなければならない。そのことに気付かせなければ。

こちらも忙しい。就職者の履歴書指導や応募用紙を整えなければ……。進学希望者のA O指導もある。そうだ! 期日を常に頭に入れて、書類の不備等がないようにしなければいけない……。

今振り返ると、私自身初めての3年生担任で、ぎりぎりの期限の中を緊張を強いられる仕事の連続で、プレッシャーを感じ過ぎていたように記憶している。そのため、百合の進路選択に関わる不

安や悩みなど十分にくみ取れなかったのだと思う。

■履歴書指導で

保護者の協力があり、受験させる方向で頑張らせようという方針になった。しかし、履歴書指導はいくつも越えなければならぬ壁がある。①志望理由の文章。400字くらいだったかと思うが文章を手直しするのが大変。②検定・資格欄の記入。商業関係の資格が多数を占めているため難しい。③、①と②をクリアして初めて清書。鉛筆での下書きのチェックを受けてから清書する。しかし、一字の誤字でも一か所の汚れでも全て書き直し。

百合は①、②はなんとかクリアしたものの、③の段階で、何回か書き直しとなってしまった。その時、彼女は、頑なに書き直しを拒否した。彼女の言い分を聞いたり、論じたりという方法では通じない。やむを得ず、私は突き放すように指導した。そのときのことを私は次のように記録していた。

8月26日(水) 就職希望者18名志望動機作成履歴書記入など、山場を迎える。幸い2時間しか授業が入っていないためなんとか身体がもっている。ぐったりやつれる。7時に学校行き、20時に帰る。でも今日はいいこともあった。履歴書の書き直しを迫る場面、生徒を苦しめるようであつた。その場で生徒は落胆する。百合は「もうこれ以上書かない」と言う。しかし、厳しくやり直させると

生徒は受け止めて、それを乗り越える。教員が高い壁にならないのだ。

この日の夕方、外が暗くなっても、一人教室で履歴書を一生懸命清書している百合の姿があった。百合との関係だけでなく、生徒に対して「ここはという場面」では決然として臨まなければいけないと身をもつて学んだ。

■面接指導

面接指導も遅々として進まない。面接練習の場面になると、百合は椅子に座って動かなくなってしまう。椅子の上に体育すわりをして膝を向こう側に向け、泣きながら抵抗する。土曜日の午後、たつたか、別な用で登校していた百合に声をかけ、選択教室で面接練習を試みた。私は面接指導を拒否する百合にその必要性を優しく諭そうと試みた。私「面接はなぜあるかわかる？改まった場できちんと受け答えできるか見るためのものだよ。どんなところにせよ、就職するためには避けて通れないんだ。初めは誰でも不安で緊張するけれども、一つ一つ練習していけば必ずできるようになるから大丈夫、やってみよう」

百合「やだ、やだやりたくない。面接したくない、やだやだ」
(涙を流しながら、面接練習を拒否する。)

私「将来必要なことだから、やろう。嫌でも必要なのだから。嫌だ嫌だと言っているといつまで

も嫌なのだよ。嫌でも少しずつやっていたらできるようになるよ。入退室だけでもさあ」

百合「やだ、やだ、面接したくない、話すことなんかできない。なんで、初対面の人に自分のことを話さないといけないの、履歴書に書いてあること読んだら分かるのに」

私「同じ職場で働く人がどんな受け答えをする人か分からないと雇ってもらえないんだよ。面接練習しないと、希望している会社に就職できないよ、それでいいの」

百合「いい、就職しない、何もやりたいことない、家にひきこもる」

私「百合、こうしているうちに、少しでも練習しよう」

百合「やだ！ 面接嫌い」

……
という具合で、こんなやりとりを30分くらい続けたものの、全く練習にならない。このときは肩を落とした。

■繰り返される面談

就職に対する意識も高まらず、十分な面接練習もできないままに月日が経った。試験の結果は、不採用となった。その後も何社か受けるものの、採用にはならなかった。このままではいけないと思いつつも、それでもやはりどうすることもできず、対応に苦慮していた。

保護者や本人と面談を重ねた。日曜日に三者面

談をしたこともあった。就職したいならば、面接指導などを拒否せず最後まで粘り強くがんばれるかどうか、問われるという話をした。必要な指導を受けることができるのかというと、涙を流しながら嫌だと言う、ではどうするのかと問うと、「知らない、何もない」という。専門学校に進学するという選択肢もあったが、本人は拒否していた。このようなやりとりが11月くらいまで続いた。

■文化祭

時期は前後するが、彼女に対する関わり方で、就職や進路の話以外でもっと共有できるものをもと考え、まず本人と何でもいいから話してみることにした。そのきっかけの一つは、9月の文化祭である。彼女は華道部に所属し、草花が非常に好きであった。とても見事な作品を展示して、好評を得ていた。写真を撮らせてもらい、好きな分野を進路に生かすことができないか考えてみた。それ以外にも、上手なお菓子作りの話。クッキーやチーズケーキなど、洋菓子は分量が決まっているため、迷う余地がなく、作るのが楽だという話をしたりした。そんなとき、彼女は生き生きと本当に楽しそうに、時に聴き手を無視するくらい、好きなことを話す。いつのことだったか、面接練習の合間に集中力がもたず、雑談したことがあったが、5分前には涙を流したとは思えないほど、笑い声も交えながら話すのである。今振り返ると、指導がうまくいかない中で、私自身救われていたと思う。

華道部の顧問の先生に心を開いていたため、その先生から、面談や個別に面接練習など、百合への細やかなケアをしてもらった。

(4) 進路決定

クラスの周りの生徒が次々に進路先を決めていく中で、百合はなかなか決まらない。どうしようかという焦りがあったが、次の一手が見つからない。職員室では、専門学校のビジネスコースに入って社会人の基礎を学ぶのがよいのではないかと、人とあまり関わらない、製造の仕事がよいのではないかという話もあった。

12月の半ばのことだったと思うが、母親から医療事務の専門学校に通わせたい、本人も納得している、という話を受け、ではやってみようということになった。母親がリードして進んだ話なので、果たして本人の適性に合っているか周囲の先生は疑問をもっていた。しかし、本人が少しでもやってみようと考えているのであれば、この際やってみたほうがいいのではないかと私は思い、そのように本人に声をかけたことと記憶している。専門学校へ行っても短期の通信とスクーリングである。わずか4か月のコースであるからチャレンジしてみるのがいいと。

(5) 卒業と私の離任

2月はほとんど授業がなく、年が明けると入試業務であつという間に卒業である。私はあまりこ

のときのことを詳しくは覚えていないが、順調に新しい道を進んでいたようである。2月の登校の際には、私に手作りのお菓子をもってきてくれたのを覚えている。

3月は私の転勤もあった。離任式の日、なつかしい卒業生とともに、百合も来てくれた。彼女は得意のチーズケーキをきれいに包装してもらってきてくれた。そのときに次のような手紙が添えられていた。

3年間いろいろと心配や迷惑をかけてすみませんでした。面接練習では私が面接を嫌いすぎて、ちゃんと向き合うことができなかった今ではしっかりと向きあっていたらよかったなと思います。今は医療事務の資格取得を目指して学校に通っています。同じクラスの人や担当の先生とも仲良くやっているので、このところは安心してください。就職が決まったら連絡するので待っていてください。3年間ありがとうございました。百合より

(6) 卒業後

現在の岩出山高校に転勤となり、すぐ1年生担任。慣れない学校で忙しくしていた私だが、6月半ばの夜に突然百合からの電話があつた。それは医療事務の資格を取るとともに、自宅から通える病院に採用される見通しだという報告の電話

であった。数日後に採用のための面接があるという話を、彼女は元気な声で私にしてくれた。私は思わず、「面接は受けられる？ 昔、すごく嫌だった言っていたから」という話をした。その後は、面接に自信をもって臨むべきことや一般的な注重心構え、それから悩みながらも開拓した自分自身に誇りをもって頑張れば絶対大丈夫であることなど、今考えると余計なこと話しながら精一杯の励ましの言葉を送った。最後に、連絡をくれて本当にありがとう、面接の結果が出たら、改めて連絡をくれるようにと念を押した。そのときには彼女の友人たちともにお祝いにご飯を食べに行こうと伝えた。

1か月後、夏休みの日程を調整して集まったなつかしい卒業生たちとともに採用が決まった百合の姿があった。私服でおしゃれをして久しぶりに再会する生徒たちは、もうすっかり大人であった。ひととき、食事をしたり、お茶を飲んだりしながら卒業生たちは近況や高校時代の思い出を語り合った。

さらに1年後、彼女はある報告があつて学校に行つたそうである。私は直接百合から電話連絡を受けてそれを知った。それは、勤務の配置転換があり、今度は受付業務に従事するという。それまでの真面目な勤務態度が評価されて、より患者さんや一般の人との関わりが増える仕事に抜擢されたのだらう。カルテの管理や来院した人への対応など、一生懸命仕事をしている姿が目に見え、

彼女が元気に社会人生活を送っていることがうれしかったが、それ以上に彼女が近況を伝えようと学校に足を運んだことが、学校が彼女にとって卒業後もなお行ってみようという、そんな場所であるということが、とてもうれしかった。

(7) 進む力 (結びに代えて)

百合は現在、病院での受付業務で、日々患者さんや面会に訪れた人々に対して、一生懸命対応している。入院しているおじいさんやおばあさんから、孫のように大事にされ、よく親しみをこめて話しかけられるという。

彼女が卒業して、一年以上経ち今振り返つてみると、進路指導として反省することばかりで何も

できなかったと思う。進路の方向についても、一緒に悩んだり、相談相手になつたりするくらいで、積極的に方向性をうちだしたわけでもない。彼女の母親の提案がなかったとしたら、進路選択はできなかったのではないかとさえ考えてしまう。

それだけに、一旦決めてからの彼女の前進する力には目を見張った。すごい、あつという間に資格を取り、就職試験の面接も見事にクリアし、1年後には、大病院の受付で、様々な立場の人と会話し、話を聴き、説明や案内をしている。そして、時に患者さんから声をかけられ、話し相手になっている。最近では後輩の指導にもあたつてい

か。

3年生で彼女を担任したときに、このようなビジョンは私にはなかった。全く想像できなかった。面接指導や履歴書指導など一連の「進路指導」という名目で私がかけた言葉は、一般的には必要なことだったのかもしれないが、今考えると陳腐な、外れなことのように思えてならない。彼女自身、「迷惑をかけました」といつてくれるものの、しかし私は百合の進路のために何ができただろうと考えると怖くなつて仕方がない。

もし、私があの場合に戻るとしたら、その時とは違ったことをできるだろうか。時に立ち止まつたとしても、「大丈夫、進んでいくことができるから」と言いたい。言えないまでも、そのようなメッセージを伝えたい。自分自身や自分の生きる世界に対して安心感や信頼感をもてるような、進む力



を後押しする前向きな言葉をかけることこそ必要ではないか。

しかし、今日の若者の状況に目を転じると、樂觀はできない。ブラック企業や奨学金問題、正社員になることの困難さ、依然として高い子どももの貧困率の問題など、若い人たちが抱え、将来待ち受けている生きづらい状況は深刻であり、一層進路の選択を難しくしている。

今私が担任している2年生は進路を模索し、一定の方向性をもたせなければいけない時期である。こちらの言葉に耳を傾けてくれない、何を考えているか分からず話がしづらい、働きかけても応じてくれない、幼い言動……。思い通りにこちらがいかないときに、「社会ではぐが必要だ」とか、「くしないと、就職できない」のように一般的な注意で、生徒を動かそうとしてしまうことも多い。仕事をすすめる上での覚悟や社会で言われる「常識」を伝えることも確かに大切であるが。

しかしながら、私はどこかで生徒自身の内側にある前に進む力、こちらの狭い枠内に収まらずに人生を切り開いていく可能性を信じて、関わっていきたい。前進しようとする力を引き出し、認め、それを後押しするような関わり方を探っていきたい。百合はそのことの大切さを私に教えてくれたのだと思う。

〈文中の写真は記事とは関係ありません〉

（大崎・岩出山高校）

「みんなで育つ」〜文学作品の読みをとoshie〜

久しぶりに宮城の教室から生まれた実践記録が表題の「みんなで育つ」という小冊子になった。仙台・能力発達サークルが、サークル員の佐藤正夫さんが2年生と行った国語授業の記録であり、教師生活最後の年の実践記録です。

正夫さんは、はじめにのところで次のように語っている。「子どもが育つためには、夢中になれるもの、考えずにはいられないものがどうしても必要です。〈中略〉そのために、発達サークルや学習会に参加し、『いい教材とは』や『どんな発問がいいか』など、授業についてたくさんのことを教えてもらいました。でも、教材がいいからといって授業がよくなるかというそうではありませんでした。同じ教材で授業しても、うまくいかないことが何度もありました。分かったつもりになっていただけで、実は教材の本当に大事な部分が見えていなかったからです。『授業で子どもを育てる』などと簡単に言えないことも身につきました。子どもたちが少しでも集中する授業にするために、学び続けることが自分の仕事だと思ようになりました」

冊子のあとがきで千葉建夫さんは、サークルの課題としてきたことについて、「作品の内容を、教師が『教える』のではなく、子どもがひとりでにわかってしまう授業に組み立てていきたいということ。そのために、教師は授業であつかう場面を細かいところまで読みこみ、一枚の絵にすること。その絵を子どもたちも描けるように、わからないことばは教え、言語の世界を広げながらも、子どもの想像が働くように授業での発問を組み立てることです。教師が発問するたびに子どもの頭の中の絵がぐいぐいと鮮明になるようにしてやりたい」「それはたいへん困難な仕事でした。授業は指導案どおり進むことはなく、いつも子どもの反応に対応した瞬間瞬間の問い返しや切り返しが要求される」と記し、正夫さんの報告に対しても、「授業案どおりに進める授業ではなく、子どもの発言に対応し、授業をつくろうとした教師の全授業の記録です。子どもの反応に戸惑い、発問に迷いながら、ときには、やりなおしの授業をしてまでも、作品を子どもとわかりあいたいと願う教師の格闘の姿をそこに見る」と述べています。

学習指導要領の改訂では、教育内容も方法も統一され上からのおしつけが多くなり、進度も指導の方法も学年で統一され、画一的な教育活動で、子どもの学ぶ喜びが育てられるはずはありません。さらに、子どもたちを規律や道徳にはめこんでしつけようとするなら、子どもの心はいっそう荒廃するだけでしょう。冊子を読み国語の授業だけでなく、日々の教育と授業のあり方を考えるきっかけになればと思います。



わたしの出会った子ども1

ひろゆきくとたかゆきくん

渋谷 信賢

教師をやつて29年目を迎えている。担任した子どもも500人を超えているし、それ以外にもかわつた子どもを含めるといったい何人の子どもたちに出会つたのだろう。今回、原稿の依頼があり、多くの子どもたちの顔が浮かんだが、ひろゆきくん(仮名)とたかゆきくん(仮名)のことを書くことと思う。

ひろゆきくんを受け持つたのは教師になつて6年目。3年生だつた。年子のお姉さんとの二人兄弟。複雑な家庭環境で、忘れ物が多い。宿題はやつてこないし、成績も思わしくない。前年度6年生を担任し、無事送り出し、教員として変な自信をもつてしまつていたのだろう。私は自分で何とかしよう、成績も上げてやるし、忘れ物のくせも直してあげようと思つてしまつたのだ。

今でいう発達障害だつたのかもしいないし、難しい家庭環境も担任一人の頑張りでほんともなるものではない。今なら別の手段がある。しかし、突つ走つてしまった。毎日居残り学習をさせるし、宿題をやつてこないことごとく

怒つた。やればできると私は思つていたが、ひろゆきくんにとつてはとんでもない先生だつたろう。当時は毎日作文の宿題を出して、作文をなかなか書いてこないひろゆきくんが作文を書きさえすれば何とかなるのではないかと思つていた。怒りに怒つてやつと書いた作文が、「先生はおこると怖い」というタイトル。

ぼくがさんすうのテストで0てんとか10てんをとると先生はぼくのことをおこります。かんじのテストでも30てんとか20てんをとると先生はぼくのことをおこります。どうしてそんなにおこるの。こくごでもしゃかいでもおんがくでもおこります。ずこうでえをかかないとおこります。ぜんぶのじゆぎようでおこります。もうおこらないでください。とてもこわいからです。

これには参りました。というか自分は何をやつてきたの、だろうと思つた。わからないからできないのだ。忘れ物にだつて持つてこれない理由があつたのだ。もつと「できない」、「わからない」ひろゆきくんに寄り添うこと

はできなかったのか。久しぶりにひろゆきくんの作文を読み返してみても恥ずかしくなると同時に改めて情けなくなりました。

たかゆきくんは自閉症の男の子。教員生活13年目で初めて特別支援学級の担任になり受け持つた子で、2年生。面くらいました。言葉が通じないし、彼の思いもわからない。教室は抜け出すし、最初のころは彼の後ろをついていくだけで1日が終わつてしまつた。それまで私がやつてきたことが全く通じない。でも一緒に過ごす中で、とにかく私があなたの近くにいる大人で、安心していいよ、とのメッセージは出した。続けた。そのかいあつてか何とか落ち着いて生活できるようになつてきた。

しかし事件は起こつてしまつた。学年の校外学習に一緒に参加し、昼食を食べ、たかゆきくんの荷物を片付けようとちよつとだけ目を離したときにたかゆきくんはその場からいなくなつた。周辺を探したがいない。学年の先生たちにも一緒に探してもらつたが見つからない。バスの出発時刻になつたので、学年本隊は学校に戻し、数人で探し続けた。幸い、付近を通つた方に見つけていたのだが(結構遠くまで行つていた)、車にでもひかれていたらと思うと今でもぞつとする。明らかに私のミス。学校の先生というのは、子どもの命を預かる仕事なのだというのを改めて考えさせられた。

今では校内でもベテランといわれる部類に入って学年主任も任せられている。クラスの子どもたちだけではなく、学年の先生たちをリードしていく立場になった。でも、子どもたちと

わたしの出会った子ども2

お前なんか教師失格だ

接していると毎日が勉強なのかなあと思う。何百人と関わってきても同じ子どもはいないのだから。

（名取・増田小）

掛川 恵一

転勤して新しい職場に移って1年が過ぎたあ

る日、手紙が届いた。前の学校で担任したアキラ（仮名）とその母親からだ。アキラの文章には、この春に卒業したこと、小学校では取り組む前に、できないとあきらめてしまっていたので、中学校では、「何に対してもあきらめない。」を目標にがんばることなどが書いてあった。そして、母親の手紙には、アキラの卒業アルバムの記事をぜひ私に読んでほしいと書いてあり、全文が書き写されてあった。（以下は抜粋）

『小学校生活で学んだことの』二つ目は、『先生方のやさしさ』です。理由は、ぼくがたくさん悪いことをしても、見捨てたりはしなかったからです。とくに、4年、5年にお世話になった掛川先生には悪いことをたくさんしたのに、最後まで少しも見捨てずに指導し、しかつてくれたからです。今までの中では、一番よい先生

だったなと思っています。……とあった。

始業式の担任発表のとき、一番前で露骨にいやな顔をしていたのがアキラだった。機械好きの父親に似て、手先が器用で、図工や理科が得意だった。また、働きの素敵な面もあり、算数の時間にはこんな出来事もあった。

教科書にある牛乳パックの容積を求める問題を計算すると、1000立方センチメートルにならない。実際の1ℓパックには当然1ℓと書いてあるので、そのことをどう考えるかを議論した。「俺たちは騙されていた」「えっ、本当にそうなの。」と大いに盛り上がったが、液体が入っている紙パックの横の膨らみにいち早く気付いたのはアキラ。そこで、紙パックに書いてあるお客様サポートセンターへ電話をして確かめることにした。代表で話をするのは、もちろんアキラ。携帯を耳に当てて話すアキラとサ

ポートセンターのやり取りを集中して聞く子ども達、学びが教室を出て社会とつながった瞬間だった。そんな場面もあったが、題名の通りの出来事もあった。

放課後、アキラからある出来事の事情を聞きながら、良くなかったことを本人に振り返らせようと話をしていた。すると、突然アキラは激高し出し、私の額に人差し指を突きつけて、「お前なんか教師失格だ。」と叫んだ。あまりに唐突で衝撃的な一言に動揺しつつも、それを悟られまいとしながら、アキラには先生の何が悪いのかを聞いた。正確な中身は覚えていないが、それは筋違いというようなアキラの言い分だった。それでも、まずは落ち着かせるべく彼の話を耳を傾けて、そう受け取られるようなところは先生も悪かったかもしれないと話した。その後、落ち着きを取り戻したアキラは家に帰って行った。今にして思えば、「教師失格」と叫ばせるまでアキラを追い詰めてしまったのだから、そんな出来事がアキラとの間にあった。だから、アルバムの文章には、本当に驚かされたけれども、母親は、手紙の最後に、こう書いてくれた。

『作文を読み、先生の生徒を思う熱心な指導が次々思い出され、胸がいっぱいになりました。すぐには伝わらなくても、本物の気持ちは、必ず届くものです。先生と過ごした2年間がアキラの中で大きな財産となっていきています。』（略）』

手紙を受け取った当初は、「ああ、アキラに届いてよかったなあ。」という思いと、それをそう受け取られるようにフォローをし続けてくれた母親への感謝でいっぱいだった。と同時に、教育という仕事は簡単には答えが出ないものだと思えて実感した。けれども、また

わたしの出会った子ども。

ヤンちゃん和美奈ちゃん

佐々原 和子

17年ぐらい前に担任した3・4年生の学級に、外国籍の子どもが3人いた。近くに留学生が居住する宿舎があったので、決して珍しい学級ではなかった。

両親とも中国人のヤンちゃん(女の子)は、全く日本語が分からないまま編入してきたが、楽しく愉快な子だった。言葉は知らなくても、黒板に出てきて算数の問題を解いたり、楽しみに歌ったり踊ったり、休み時間には級友を追いかけて遊ぶので、間もなく級友とおしゃべりして笑い合う姿がよく見られるようになった。半年ぐらい過ぎると、算数が得意なヤンちゃんは、漢字力は勿論、他の教科でも力を発揮するようになった。

時間がたった今は少し違う。今の自分だったら、もう少しアキラへ思いが届くような関わりができたかなということ。なぜなら、母親の本当の願いは、そこにあったと思えるから。

(仙台・桜丘小)

そんなヤンちゃんは、家庭の事情で学校を休みがちだった妹思いの美奈ちゃんと仲良しになった。放課後の校庭でよく遊び、互いの家に行ったり来たりすることもたびたび……。喧嘩して「絶交宣言」もするが、すぐ仲直りする間柄になった。ヤンちゃんは、大衆的な日本の子ども文化を、美奈ちゃんからたくさん吸収したようだ。

4年生になって、地域の石垣職人に伝わる「すずめ踊り」に1年間取り組んだ。運動会で発表した踊りは、保存会の方々にお囃子を協力していただいた。総合の時間には、青葉城の石垣を築いた職人の末裔・黒田石材屋さんのお話を参考にして地域の歴史を学んだ。黒田家は大阪か

ら伊達政宗に招かれ、青葉城の石垣作りと管理を任せられた家柄。城の土台ができた時、政宗が大喜びして酒の席で踊った(即興)のが「すずめ踊り」の始まりらしい。関連して、その頃着工した「四谷用水」についても教わった。

学習発表会では、子どもたちのお囃子で「すずめ踊り」をアレンジし、ぶち合わせ太鼓にも取り組んだ。転入生が来た時は「すずめ踊り」で歓迎し、「すずめ踊り」保存会からお誘いがあれば、子どもたちは地域の行事にも進んで参加した。腰をかがめて扇子を振りかざし、夢中になって踊る姿は本当に生き生きとしていた。ヤンちゃんも喜々として踊っていた。相変わらず休みがちだった美奈ちゃんも、地域の行事には喜んで参加した。

しかしヤンちゃんは、4年生の終了を待たずに、お別れ会をする間もないくらい急に、東京へ転校して行った。

あれから15年。ヤンちゃんから一通の手紙が届き、「すずめ踊り」のお囃子があちこちから聞こえる仙台で、今年の5月、私は、ヤンちゃんと美奈ちゃんに再会した。ヤンちゃんは今、東北大学法学部の研究生として学んでいる。美奈ちゃんは東京で働き、妹と楽しく暮らしている。

(元小学校教員)

「教育文化」の誕生とそのねがい

1 はじめに



「教育文化」という小さな雑誌があった。サイズA5版で32ページ。宮城県教職員組合の機関誌。1962年4月に創刊。2008年3月の492号をもって休刊となる。46年間つづき、購読者の多くに惜しまれて今は姿を消している。

表紙の題字「教育文化」の文字デザインは高橋錦吉。その高橋をウィキペディアは次のように紹介している。

第2次日本工房への参加・三省堂図案部での勤務の後、日本写真工芸社やFRONTでの活動や1938年の「日本スキー」のポスターが有名。戦前から活躍した、近代的なグラフィックデザイナーのひとりであり、レタリングでその才能を開花させたことで知られる。第二次世界大戦後の1951年には、原弘、亀倉雄策、早川良雄、山名文夫らと、日本宣伝美術協会を結成した。

明治44年9月15日生まれ。広告作家懇話会、日本産業美術協会などに参加。出版物のレイアウト、ポスター製作などに活躍。昭和55年9月23日死

去。69歳。徳島県出身。神奈川工業卒。著作に「図案の基礎」など。

この著名な高橋錦吉に「教育文化」の題字の仕事をするように働きかけをしたのが、群馬の人である篠崎五六。篠崎の力がなければ高橋錦吉の題字が生まれなかったことはまちがいない。

篠崎は当時「麦書房」の編集長。岩手県の小繋山入会権問題裁判では長期にわたって支援に入った文化人グループのひとりでもある。麦書房時代から「読み方定期便」と名づけて、読み方用の教材発掘に努め、全国の民間教育サークル関係者の間で使用される自主教材を紹介しつづけた。

篠崎は、創刊号から「困ったときに聞かせる物語1 性の行為を知った子へ」も書いている。

「教育文化」の表紙は、上部にその題字が置かれ、下の部分には毎号吟味された写真が1枚置かれる。

その写真のすぐ上に、「表紙のことは」と称した短いことが載り、「ことば」は毎号入れ替わった。創刊号のことは「感覚の正しさには 行動の正しさがつづくものである」(スタニスラフスキー)。

その「ことば」の解説が本文で1ページとついている。23号までこの「表紙のことば」を選んで解説文を書いたのは木村次郎。

木村も篠崎と同じ群馬の人。手元の木村次郎著「言葉の行為」を開いてみ

る。その内容は、教育、演劇、民話、地域文化、社会や平和問題など多岐にわたる。詩を書くからと「詩人」としておさめきれない。演劇にかかわるからと「演劇人」としておさめきれない。演劇にかかわるからと「演劇人」としておさめきれない。演劇にかかわるからと「演劇人」としておさめきれない。

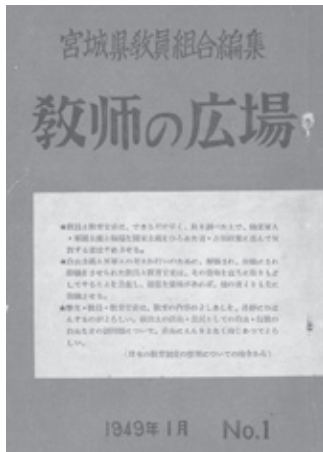
「表紙のことば」は、24号から高橋金三郎にバトンタッチされる。この「表紙のことば」と解説の1ページは変わることなく最終号まで39名の書き手によってつづけられた。

2 宮教組初の機関誌「教師の広場」

表紙について詳しく述べたつもりだったが、1か所説明を落としていた。それは、写真の下に小さい字で「教師の広場改題」と書かれていることについてである。

つまり、「教育文化」が誕生するまで、宮城県教職員組合（宮教組）の機関誌として「教師の広場」が発行されており、「教育文化」は、その「教師の広場」に代わってつくられたものという意味になる。

なぜ名を変えたのか、なぜ「教師の広場改題」と表紙に置いたのかは、後での話が明かしてくれるが、ここでは、簡単にこの「教師の広場」についてふれておく。



「教師の広場」は、「宮城県教員組合編集」として1949年1月に「No.1」が出される。県教組結成大会が1946年2月27日、五橋国民学校講堂で開

催（宮教組五十年史）されているので、発刊はその3年後ということになる。この「五十年史」には、年表に「月刊機関誌『教師の広場』創刊」とあるだけで、その経緯や願いについては本文中に記載されていない。結成3年目ということを思い浮かべると結構早い時期の機関誌刊行と

思え、意気込みが感じられる。

創刊号の編集後記に、その願いが読み取れるので、そのまま次に記す。

★こうして機関誌をもつことになると、かつて宮城県教育会が発行していた『宮城教育』を思い出す。宮城教育は会員とどんな結びつきをしていたか。会員にはどういう貢献をしていたか。どれほど教師のよろこびとかなしみをわけあう広場であり得たか。

★このことはこの『教師の広場』にも同じように言うことができる。ことにこれは、教員組合の機関誌であるだけに、組合員とのむすびつきは一そう緊密でなければならぬ。

★これはしかし編集のしごとだけではできない。この機関誌が真実組合員のものになるためには、組合員ひとりひとりの関心と、たくましい批判がある。その上に寄稿活動が活発になされ、民主的に編集が行われてはじめて組合員に密着することができ

る。
★生まれたいものは育つ権利がある。この機関誌も健やかに育成される権利がある。（文化部）

「教師の広場」創刊号 もくじ	
教員組合と職能活動	山内 才治
新制高校に於ける生徒組織の問題	安住健太郎
児童生徒自治組織指導の基礎	佐藤 一男
組合創生記	狩野 兼雄
教育公務員特例法をめぐる	金本東治郎
はがき回答	
— 今後の組合運動に何を望むか	
教師の広場	
☆丁子の嘆き	村田 幸造
☆爆弾ろんぎ	富田 博
☆秋の窓	鈴木 長一
☆定時制高校経営の難航	沖津 卓
☆児らとともに	半澤 いち
☆文化と郷土愛	大内 清雄
国語力の調査	堀川勝太郎
生産教育論	石田嘉兵衛
国語教育に於ける	
生活指導の重要性	萩野 守
教科書批判	
社会科学教科書を批判する	大村 榮
書評	

「教師の広場」は12年目になる1961年3月の29号でもって終刊となる。「非売品」ということで全分会（学校）に届けられた。個人購読ではなかったため、どのように広く読まれたかはわからない。また、定期刊行は難しくかつたようで、後半は、年1〜2回の発行になつてゐる。

3 菊池鮮と「教育文化」刊行構想まで

「教師の広場改題」は、この「教師の広場」を止めて「教育文化」発行に切り替えたという意味になる。

両者とも宮教組機関誌で、担当は教育文化部である。この切り替えは、「だが」「なぜ」ということであり、それが「教育文化」発行の趣旨を考へることになる。

「教育文化」の発行・編集責任者は1961年度から本部教文部長になつた菊池鮮である。

菊池から直接話を聞こうと、菅井・清岡・春日の3人で、8月初め、栗原市瀬峰のお宅をたずねた。以下は、その時の菊池の話と「宮教組物語」あしあと40年（宮教組発行）、書き続けている菊池の自伝的小説「追憶」、それに「教育文化」そのものをもとにして書き進める。

教文部長になるまでの菊池の歩みが「教育文化」に込めた願いと大きくかわると思うので、初めに、菊池の略歴を示しておく。

1925年、朝鮮で生まれる。姉の名は「朝枝」、姉弟で「朝鮮」となる。

これは父が朝鮮民族差別に腹をたてていたことからかもしれないと考えている。母親が病弱で朝鮮の人に育てられたこともあり、日本語が全く話せ



なかつたことを心配し、家族は岩手県に帰る。父親の仕事の関係で小学校6年間で8回も転校する。その間、宮古の小学校で、唯一尊敬するナガイシヨゾーに会う。

高等科2年の時、満蒙開拓青少年義勇軍の試験を受ける。2年後、新京師範学校に入学。3年の時、海軍甲種予科研究生を志願、山口県防府の通信学校に入学。卒業時に敗戦。

3年後、栗原郡瀬峰小学校に勤め、8年間在籍。その後、瀬峰中学校、高清水中学校に勤務、36歳の1961年、宮教組の教文部長になる。

（菊池の書いている「追憶」から伊藤稔（美里町）にまとめてもらった）

教文部長になるまでの間、菊池は転々と歩いた小学校生活、そして教師生活を通して、教師への不信感を募らせていた。（こんな仕事はダメだ、教師を止めよう）と思つたことがあつた。

教師不信がつのるなかで、岩手のナガイシヨゾーだけは違つていた。プランコで本を読んで聞かせてもらったことがある。カタカナ文字の主張者で、変わった先生だつた。菊池が外にいても「教室に入れ」と言わなかつた。「入りたくなつたら入ればいいさ」という調子だつた。菊池は1年間プランコですごしたようなものだつた。本なども読んで聞かせてくれた。教科書はあまり使わない。もちろん当時教科書がなかつたから雑誌でもなんでもかまわなかつたのだが、菊池が義勇軍にゐるとき、ただひとり手紙をずっと送りつけてくれた。

そのナガイシヨゾーに「オレ、学校辞める」と言いに行つた。そしたら、「辞めるんなら辞めたらいい。2〜3日泊まつていつて考えてみる」と言う。何を考えるかというところ、「子どもの顔をいろいろ浮かべてみる。もし心配にならなかつたり、子どもの顔がいろいろ浮かんでこなかつたら、お前、先生なんか辞める」と言われた。「そんな先生の価値がないからなあ」と言う。

菊池は（そうかなあ）と思つて泊まつた。（オレはそもそも教師になる気がなかつたし）と思つていた菊池は、ナガイシヨゾーの問いによつて、結

局教師を辞めることに踏み切れずに済んだ。他の教師に種々問題を感じながらも、菊池自身は教育の仕事が好きだったということだろう。

菊池は「子どもを叱ったことがない」「中学校でも男女を分けてあつかうことはしなかった。クラス内の男女は自由にしゃべりあった」と言う。

「お前のクラスはなんであんなに仲いいのや、さっぱりわからない」と、いつか教室に来た真壁仁に言われたこともあったと言っていた。

「他のクラスに、よく、板張りに穴をあけたりはがしたりする生徒がいたが、オレのクラスにはいなかったし、直せと言ったわけでもないのにオレのクラスのやつで直して歩いたのがいた」とも言っていた。

ナガイシヨージは、そんな菊池を見抜いて「子どもの顔を浮かべてみる」と言ったのだろう。その実、菊池自身、「オレは、ナガイシヨージと長沼校長（瀬峰時代）に出会って教師をつづけられた」と言う。

現場に不信だらけだった菊池に、教員組合はどのように映ったのだろう。菊池が教文部長になって驚いたのは、執行委員長が校長で、書記長が教頭だったことだ。菊池の描く組合とは大きく隔たるので、（こんな組合なんてあるのだろうか）と思い、学校現場、組合で言えば「分五」の様子を知りたくて、瀬峰から組合本部に通う途中、できるだけ学校を見て歩くようにした。すると、「お前、執行委員会に出ないで何やってるんだ」とおこられた。（お前たちこそ集まって何やってるんだと、菊池は内心思ったこともあった。そんなことが繰り返されることを通して「教育文化」を創ることが彼の頭にかぶようになっていった。

4 受け入れられなかった提案

なぜ「教育文化」という誌名かというと、当時、「山形の教育」とか「福島島の教育」とか県名をつけたものがあつた。宮城は違っていた。「教師の広場」。菊池は宮城の「教師の広場」ではなく「教育文化」と誌名を変えて全国誌にしようと思った。その本の内容も、嘘八百を書き並べるものではなく、誰も

が正直に書いたものにした。そのためにはまず自分が正直に書かなければならないと思つた。みんな成功したもののぼっかり書いているような現在の機関誌では発行する意味がないのではないかと菊池は思つた。

県名を入れず、「教育文化」という誌名にする雑誌を創ることを東北6県にも呼びかけた。青森とか山形とかはそれに賛成だった。むのたけじや真壁仁などにも同様のことを言い、東北をまとめてみようと思案した。みんな賛成してくれた。

しかし、宮教組機関誌「教師の広場改題・教育文化」の出発は、決してすんなりとはいかなかった。

菊池は、「なんとかして組合員の卒直な声や実践を発表できる本をつくりたい」と、意気込んで執行委員会に提案した。「教師の広場」は組合費でつくり、分会に無料で配っていた。菊池はその無料で配ることにも反対したのである。なぜなら、自分で金を出して買った本は読む気になるが、ただでもらつた本は読まないものだと思うからである。「だから、執行委員も金を出して読むようにすればよい。そうなれば、作る方も本気でつくるようになるじゃないか」というのが菊池の主張であつたが、その提案は否決されてしまつた。

「やめとけ、やめとけ、そんなあぶなつかしいものはやめとけ。教文部は組合費を使うことだけじゃないか。いつだって赤字をつくるんだ。赤字を出して泣きついたって知らんぞ。」
といった調子だったのである。

サークル代表者会議でも同様の考えを話すと、

「編集委員長にはだれがなるんですか。」
「わたしです。」

「編集委員は各支部から推薦して決めるんでしょう。」

「いや、それは困る、編集委員も私が決めます。」

「載せる原稿はだれが決めるんですか。」

「私です。」

「それでも組合の雑誌ですか。あんたが勝手に編集委員を決めて、どの原稿を載せるかを決めるのも、あんたがやる。それじゃあ、まるであんたの本じゃないですか。それだったら、サークルにも迷惑をかけないように、自分で好きなようにやるんだな。ガリ版でもやったらいいじゃないですか。そうすれば、売る売れないもあなたの勝手なんだ。」

というような調子で、執行委員会と変わりのない反応だった。

菊池は後で考えてみると、(自分の説明がなっていないか)と思った。しかし、自分としては「編集に責任をとる」ということはどういふことかについて真剣に考えていた。

5 菊池の考える編集責任ということ

編集長である自分が責任をとるということについて以下のようなことだと考えており、それは後になっても変わっていないと菊池は言う。

(1) 読んでみて自分が理解できない原稿は載せない。例え高名な人の原稿であっても。それが編集長の責任のとり方だ。後で話になるが、東北大教授で、戦前の「教科研」の功労者のひとりでもあるM先生の原稿をことわって、ものすごくおこられたことがある。その原稿は特別な字で読みにくいだけでなく、ひどく観念的な文章に思われたからであった。

(2) 編集委員が支部推薦では、自分の責任の負いようがない。この人こそ信頼できると自分が編集委員を決めるのが編集長の責任のとり方なのであり、編集方針は編集長が責任をもって考えることだ。

(3) よその本で間に合うような本は作らない。ことばを変えれば、独自な本にするとということである。日教組の「教育評論」の原稿を転載したりはしない。もし読みたい人がいれば「教育評論」を読めばよい。

(4) 組合機関誌にするが、自分たちで自分たちの組織を自由に批判できる本にしたい。つまり、組合批判・非難の載る本にしたい。これはいつになってもうまくいかない。これがうまくできたら、「教育文化」はもっともつ

と売れるだろうし、組合のためにもなると考える。

(5) 教育実践の成功より、苦しみ、失敗、悩みを、本音をどんどん載せることが望ましい。

(6) 論争のない本はつぶれるので、「教育文化」は教育論争の場でなければならぬと考え続けなければならない。

このようなことを考える菊池の提案は執行委員会でもサークル代表者会でも理解してもらうことはできなかった。

6 購読者を募って歩く

執行委員会とサークル代表者会議で否決され、「教育文化」は生まれるチャンスを失ってしまった。なぜ否決になったか。「そんなものは必要ない」と否決されたのではない。両者とも「赤字」を出して泣きつかれるのを恐れたのだ。だったら、「赤字」を出さない方法を考えればよい、と菊池は考えた。そこで、「教育文化」の内容と編集方針を話し、賛成者に予約してもらおうことを考え、支部をまわり、授業をみながら、読者を募集して歩いた。直接会って購読を訴えると、菊池のことばを信じる人達が少しずつふえてきた。1年間かけて420人の賛成者を得ることができた。賛成者は1か月(つまり1冊)で50円、半年分で300円納入してもらおうことになる。

計算上では、420人分の誌代は3号まで出せば金はなくなる。420人からはもう一度お金をもらうわけにはいかない。6か月出す約束で金を集め、3か月でつぶれる計画だから最初からだましましたことになる。そのときはそのときで、「ごめんなさい。やっぱり、おれの編集した本は売れなかった。ゆるしてください、とあやまって逃げるつもりだった」と菊池はその当時を振り返る。(とにかく、イチかバチかやってみるさ、そんな心境だったのである。

7 「教育文化」誕生

1962年の春、拡大代議員会が教育会館2階の大広間で開かれていた。

菊池は一度否決にあつてからは、執行委員会にも、サークル代表者会議にも二度と「教育文化」の発刊については提案しなかった。その間にこつそりと集まった金で勝手に本を作った。そして三号までは出せる原稿も集めていた。

どんなに説明しても執行委員会もサークル代表者会も自分を信用してくれない。信用してくれたのは購読予約をしてくれた組合員の420人であると思ひこんでいた。

菊池は、「教育文化」発行の再提案を拡大代議員会にとねらつていた。というのは、組合活動専門家の執行委員会と、支部の書記長だけの会では否決されるに決まつている。だから授業をしている組合員が少しでも入つてくる会議の時に提案しようと思つていた。

「それでは、教文部から提案してください。」

製本された本を書記局に重ねておいたが、だれもそれほど関心を示さずかくす必要もなかった。その「教育文化」をくばり、菊池が二こと、三こと発言したら、激しい怒りにぶつかった。

「だれの許可を受けて、組合機関誌としたんだ。執行委員会は許可したのか。」

「こんな勝手気まままことが許される

「教育文化」創刊号	もくじ
主張	現実を直視しよう
執行委員長	横沢宇進美
うしのおさん	
なくなつたマサカリ	
あべまさみき	富子
菊池	富子
富子先生の提言に答えて	
那須 静	
あかるい子ども・くらいい子ども	
実践報告	角の導入
数学湧谷サークル	
実践検討会はなぜ生まれなければならなかつたか	芳賀 直義
国民の教育要求を具体的にはどのように実践するのか	
地区勤労者会議の話題から	
詩	教育物語
菊池	新
島小公開参観の記	鈴木 孝穂
垢(あか)	田畑 信夫
表紙のことばについて	木村 次郎
木村次郎さんについて	
いわさ・けいじ	
困ったときに聞かせる物語	性の行為を知った子へ
篠崎 五六	
編集ノート	(いわさ)

と思つているのか。教文部長はなにをねほけてるんだ。」
「委員長、あなたは主張などを書いているが、こういうことを知つて書いたのか、どうなんだ。」

横沢宇進美委員長は目を白黒させて応えられない。つくつておきながら菊池は(怒るのはまったくあたりまえだ)と思つた。書記長のある人は「教育文化」をまるめて、テーブルをたたいて怒つてゐる。

「でも、もう420人分金を集めてしまつたんで、やめられないんです。」
菊池は泣き出さんばかりだった。

その時、仙台のA代議員が突然立ちあがり、

「おめえだち、なに語つてるのや。これ読んだ人、ここさいるのか、さつきから聞いてみると、勝手な文句ばかりいって、ぜんぜん読んでいねでねのか……。読んでみる、おもしえがら、反対でも賛成でもいいげつと、読んでみでがらにすてける……。言つておくけど、おれは賛成だ。今までの組合の宣伝ばかりしている本どはまるつきり違つど……。おめだち文句言つてる間におれは全部読んでしまつたど……。」

と言ひ、場は急に静かになつた。みんなが読みだしたのだ。

「うん、確かに今までと違う。」

「おもしろい。いいな。」

「今のように教育雑誌はらんしている時代だつたら、あるいは読みこたえがなかつたかも知れない。平凡なことを平凡なまま書かれた本のなかつた時代だつたということもあるかもしれない。」と菊池はその時を振り返る。

「教育文化」はこうしてついに「教育の広場改題『教育文化』」として誕生することができた。

8 動き出した「教育文化」

420人の予約購読者数では4号以降の発行見通しはたいへん厳しいことを承知の船出だったのだが、3号まで出している間に購読者はどんどんふえていき、当初の心配は解消した。その勢いを借りて、誌代集金事務を学校生

協してもらえることにまなかった。

とは言いながら、誕生後は順調に歩みつづけたかという点、決してそうではなかった。それは、執行部のせいでも、だれのせいでもなかった。菊池が一番大事にしたかった「教育文化」の内容の問題であった。

9号の編集ノートを菊池は以下のように書いている。

手ごたえがほしい

実は「編集ノート」の原稿を一度書いたのだがどうもぐあいが変わるくなく書きなおすことにした。前に書いた原稿には、今月号の論文に批判を加えたもので、ある感想としてのせよとした。考えてみれば、自分で集めたのせた原稿を批判するのだから、自分で自分にツバキするたぐいになるわけである。

いままで920冊にのびた「教育文化」ではあったが、反論がでるはずだと思つてのせた原稿も案外に反論がでないでするす通つてしまふ。なんとわびしい気がしたので、ノンキヤの私もセツカチになつて編集後記でたたこう、少し注意をひいてみよう、考えてしまつたわけだ。これでは口先で現場の人たちを信ずるといながら真から信じられなかったのかも知れない。まともに実践している人からはきつと反論がよせられると信じたいたい思いでこれを書いている。

自分の思いや、実践を書いてみるという仕事は自分を確かめてみる重要な仕事に思える。討論したり集団で行動することだつて、自分というものを確かめることに通じ、なかまのために、大衆のために、といった考えを一步進めたものになるのではなからうか。

ながい間書いていただいた齋藤喜博さんも木村次郎さんも一応11号でおわることになる。いつまでも他力本願でもいられないと思う。「教育文化」の買い手から、書き手にまわつていただきたい。書き手になるといふことはえせ文化に対する戦闘を開始することでもあると思う。

編集子いわく、なにをくわされても平気な顔してゐたい。あじがわる

くなればた買わなくなるだけ、文句はいわないのね。東北人のケンキョな美徳なのかしら。

手ごたえのある本をつくつていづつもりである。手ごたえがぜひほしい。

読者にこのような訴えをする。読者は増えているのだが「手ごたえがない」。菊池は編集ノートで同様の苦しみを繰り返して述べる。11号の編集ノートでは「教育文化の存在理由」と題して、次のようなことを書いている。

「教育文化」の存在理由

実にもうしわけないことだが3か月も遅れて発行しなければならなくなった。なん月号と銘をうたないでなん号で通したのも、それをみこしてやつたようなものだ。13号はまだか、14号はまだなのかと聞かれるたびにいてもたつてもいられない気がする。1090名の愛読者が首を長くして待つているにちがいない。と記者兼編集者兼校正係兼発送者が夢中になつてとりくんでもなかなかである。

もつとも恐しいのは発行が4か月以上遅れば第3種をとりけされることである。そうなると1冊につき送料10円かかると、原価40円でできる「教育文化」が1冊50円の誌代では袋代も出てこないことになる。独立採算制だから苦しくてもこれはのりきらなければならない。

いろいろな教育雑誌が中央から発行されている。なにもそれと競争する気はないが、もしもかりに中央誌と内容がほとんど同じであればむりをして薄つべらな50円の高い本を買う必要がなくなつてしまふ。学者の意見を、理論を知りたいのなら、中央誌を買つた方がいい。「教育文化」はそうしたものがつたものがなければならぬ。それは生き生きとした問題を現場から掘りおこすことである。これはしばしば中央誌もこころみただがはたすことができなかった。

「教育文化」の存在理由があるとすれば、そこにあるのではなからうか。そうした生き生きとしたものを掘り出す仕事はひとりやふたりの仕事では

やりとげることができない。考えてみると、そうしたものはいままでの文章をそのまま使うことで提出できるものかどうかもはなはだ疑問になってくる。こうした観点からも「文化創造の闘い」がどんなに困難なことを考えさせられる。

人類がぎずいた文化遺産を継承するといった仕事にたずさわっているわたしたちは個々人においてもなんらかの形で創造運動に参加していかなければならぬと思う。

どんよりとした日が続く。現場は火の車のような忙しきで、うつかりすると自分自身さえみうしなうのではなからうか、と思われるきょうこのころである。

自分自身を忙しさに没してみうしなってしまう。このことがぞつとするほど恐しい。これは私自身の問題でもある。自分をきびしくみつめて確かめていく闘いが意外にむずかしい。つゆがはれて太陽が顔を出す。あのかがかやしさが日本にやつてくることを確信しておたがいがんばろうではないか。

先に菊池は編集責任と考えることを6つあげた。後でそのなかの2つについて触れている。

一つは「論争のない本はつぶれるので、『教育文化』は教育論争の場でないければならぬ」と考えたことについてである。菊池は、これについて、たとえば、斎藤喜博の原稿をもらうことができたことなどではうまくいったと思つた。

最初頼んだ時、斎藤は、「なぜ私が宮教組の機関誌に書かなければならぬのか」と言つたのだが、「教育文化」を読んだり、教育実践をみたりして「おかしいではないか」と思つたことを書いてくれと、わざわざ群馬まで行って頼んだ。斎藤喜博の連載は「教師の長所と短所」というタイトルで4号から12号までつづき、31号からは「おかしいではないか」というタイトルで41号まで11回つづいた。その間、「おかしいではないか」の中に取り上げられ

た千貫小の大宮徳男が「斎藤喜博さん あなたこそおかしいではないか」と33号で反論を載せたりした論争によって、菊池のねらった全国誌的なひろがりをもせたと言つていい。(その時の二人の論争を最初の部分だけになるが、次ページに紹介する)

二つめは、「教育実践の成功より、苦しみ、失敗、悩みを、本音をどんどん載せることが望ましい。」をあげているが、「これは計画だおれだった」と言っている。これは、菊池は若い時から気になっていたことであり、おそらく「教育文化」発刊を考えたときの大きなねらいであつたと思うが、突き崩せなかつたということになる。

菊池の読者への訴えはその後もつづく。それは決してむだではなかつたことが誌面を通して感じられる。

表紙裏には2号から詩がかかげられるようになっていたが、45号からは、その場に子どもの詩や文が置かれるようになり、その解説に1ページをとり、これも筆者を替えながら終刊までつづいた。その道を最初につくつたのが山形の須藤克三。45号の「妹よ」に始まり67号の「うたを忘れたのは！」まで須藤が書き続け、その後を宮崎典男が引き継いだ。

この表紙裏もふくめて、たくさんの子どもが登場したのも教育文化だった。

菊池の願つたようには容易にならなかつたとはいへ、「教師の広場」とは内容をずいぶん異にする、有料の教職員組合機関誌として購読者を増やし、子どもを語り合い、教育実践を交流検討し合う場として大きな役割を担つた。

9 たくさんの単行本を生む

「とても心臓が強かつたのか、こわいもの知らずだったのかわからないが」と菊池は言うが、創刊号から、菊池は田畑信夫のペンネームで小説「垢」を書き、31号までつづいた。菊池にとっては「生まれてはじめての小説」と自分で言っているが、これが加筆されて4年後に理論社から出版された。「教

おかしいではないか

斎藤 喜博

千貫小学校の授業

本誌（教育文化）第三十号に、千貫小学校の「くらべ・おいかけ・たすける」という文章が出ていた。そのなかで私が、いちばん不思議に思い、おかしいと思ったことは、その文章のなかに引用されている手紙のなかのつぎの一節である。

島小と千小との違いは、島小では「よい子どもはよい授業で育てられる」といい、千小では「よい子どもは、よい授業で育てられる面が大きい。」といっているところにある感じがします。

教師の任務のとらえ方、教師の思想や世界観とのかかわりあいでも考えるかどうかなどの点でははりちがつているのではないかと、思ったりしています。

この手紙は、岩手の「スガワラ、ヤスマサ」氏が書いたものである。「スガワラ、ヤスマサ」氏は、自分の学校の同僚や父母と千貫小学校の授業参観に行き、帰ってからこの手紙を千貫小学校にあてて書いた。それを、「この衣川のおかあさん方の感動をうらがきするように、衣川からつぎの手紙が学校にとどきました。」という前がきをつけて引用しているわけである。

私は「スガワラ、ヤスマサ」氏のことには知らない。ここに引用した一節だけをみても、おそらく、公式主義者であり、観念論者であり、政治主義者であり、

実践がなく、事実をみる力もない人のだろうと思うだけである。また、島小の文献を読んでいない人のだろうと思うだけである。私が島小は、「よい子どもはよい授業で育てられる」といふことを言ったことも書いたこともないからである。私が島小は、「よい子どもはよい授業で育てられる」といふと単純に言ったことはない。大ざっぱに引きぬいてもつぎのように言ってるわけである。

「私たちは、教師が教師としての責任をはたす最大の場面は、一時間一時間の授業であると考えてきました。教師は、自分の担当している子どもたちの成長に責任をもっています。そういう責任を持つ専門家としての私たちが、自分たちの責任をはたす場面を、私たちは一時間一時間の授業の中にみいだしてきたのです。

そういう大事な一時間一時間の授業を、たしかな充実したものにするためには、一人一人の教師が、専門家としての確実な技術とか方法とかを身につけなければなりません。大工は、図面通りの家を確実に建てるわけですが、教師も、一時間一時間の授業によって、その時々、確実に子どもたちをつくり上げていかなければなりません。そのことができません。私たち教師は、教師としての責任をはたすことができず、専門家としての資格がないと私たちは思っていました。

もちろん、教師が、教師の責任をはたすためには、

社会的条件とか、地域や家庭の環境とか、学校の設備とか、学級の定員とか、職員の定員とかいうことが、大きな条件になります。しかし専門家としての私たちは、一応そういうことをぬきにしても、一時間一時間の授業によって、きりひらけるだけの道をきりひらかなければならないし、またきりひらくこともできると思つたのです。条件の悪い中できりひらくことができれば、条件のよい中では、さらにさらに大きな道がきりひらけるといふ実証にもなると思つたからです。」

（昭和三十三年発行「未来につながる学力」）

「学校の教育で、もっとも重要な場面をしめるものは授業と行事である。組織的な構成的な創造的な授業によって子どもたちは、知識を自分のものにし、集団としての高い自覚を持ち、知識とか感動とかの質をかえてゆくようになる。また、意図的な構成的な創造的な行事によって子どもたちは、集団としての感動を持ち、集団的に高まり、芸術的な感動を持ち、そのなかで子ども一人一人が、また全体が、新しい創造の世界へとはいって行くようになる。」

「だから私は、教師集団をつくることも、子ども集団をつくることも、一番『核』になるものは授業なのだと思つている。」

（昭和三十五年発行「授業入門」）

（以下略）

なぜ喜博さんに反論するのか

「最後の研究授業の時も、四十五分の授業案をたててやったのだが、わずか、五、六分で授業ができなくなっている。そういう大宮氏が何の発言もしていないのがふしぎなのである。」と四年前の私の姿をひきあいだした齋藤さんは、私も含めて、私のなかまたちがつみかさねてきた、「千貫小学校の授業の質や方向を否定しようとしている。」

齋藤さんが、島小をだいたいにするように、私は、私のいる千貫小のなかまたちと子どもたちをだいたいにする。たった十七枚の原稿で、千貫小の実践を否定しようとする、あまりにも独断と偏見にみちた、乱暴な文章に怒りを感じて、私はこの文章をかく。私に関する部分は事実であるし、あの当時は私は、千貫小の二十四人のなかまの中では、心の持ち方、教え方、教材の考え方など、最低であり、私の学習の仕方、他の人の教育実践から学ぶといえながら、つかみとろうとしたのは、教育技術のみであり、教育技術を支え、それを生みだすその人の教育観、世界観ではなかつたのである。

人間としての心の持ち方がよくない上に、技術は、島小の職員の創造したものをまねようとしたのであるから、本物で常に指導されている島小の子どもからは、はねかえされて、授業にならないのは当然であり、千貫小の子どもに、そのまねをした技術であ

らうとしたら、こんどは、千貫小の子どもたちの現実にあわないので、はねかえされた。

あの当時は、学習のしかた、心の持ち方、教え方がともにゼロに近かつたので、齋藤さんが指摘してくれたようなことは、おこるべくしておこったことであり、別に否定もしないし弁解もしない。

今までは、私は、島小で授業ができなくなつたことをほこりとし、あの時の子どもたちの表情を忘れまいとして、実践を重ねてきた。

教育の実践の場で、妥協したくなると、それを思い出せば、自分にむちうつてきた。

しかし、これからは忘れようと思う。このような形で、私のなかまたちの実践を侮辱される時に利用されるとは、あの時は思いもかけなかつたし、このように利用されるようなものを残すために、島小にいったのかと思うと、四年間、私を支えてくれたなかまたちに申し訳なさとしさを感じるからである。

「そういう大宮氏」とは、どんなことを指すのかよくわからないが、たぶん、四十五分の授業も満足にできなかった男が……という意味なのであろう。

そうでなければ、十二日も世話になり、指導をうけたくせに、なぜ正確に説明しないのかという意味にもとれる。

どちらにしても、「くらべ・おいかけ・たすける」という文章は、島小と千貫小をくらべているのではない。この文章は、ヤスマサさんのいる衣川小と、

千貫小とが学びあっている姿を、支部の教研集会に「講演」として出し、その原稿を本誌にのせて、さらに県下の仲間へ学ぼうとした文章である。

また、この文章には、「なかまの実践から学びたいからである。」と書いてあるはずだが、齋藤さんは故意にかどうか、その部分を引用していない。ついでに言うならば、文章のタイトルも、千貫小でつけたのではなく、編集部で、ヤスマサさんの手紙の中からぬきとってつけたものであり、「学び」ということばがぬけていることもつけくわえておく。

ヤスマサさんの言う、「面」であるが、島小ではなんといっているかよくわからない。しかし、千貫小では、千貫小の授業、というプリントの表紙にはつきり書いておいた。

私が、ヤスマサさんの手紙での二つの学校の違いについて一言も意見を言わないと叱られているが、島小では、その「面」をどう考えているのか、私には代弁しようがないのである。そのことは、齋藤さん自身、文章の中で、「私や島小は、『よい子どもはよい授業で育てられる』などと単純に言ったことはない。」といっていることからもあきらかである。

「単純に言ったことはない。」ということは、複雑になら同じようなことをいいたことがあるのだろうか。それとも全然ないといっているのか、読みとれないような、あいまいな文章表現をしている。当事者があるまいものを、私ははつきり断言（以下略）

齋藤喜博さんあなたこそおかしいのではないか 大宮 徳男

「育文化」から生まれた最初の単行本である。

菊池は、この本に「まえがき」をつけている。その意図を聞かずにしまっただが、そのまま紹介する。

どうしたら、おれはおれ独自の考えを出すことができるのだろうか。いつということなく気がゆるみ、うかうかと日を送り、そのうちふつと気がついたとき、おれはおれをとりまいている人びとの目の動きを気にしながら、動きまわっている自分に気がつくのだ。そして、おれはおれの考えで、その考えを深めて、行動し、発言しているつもりなのに、よく落ち着いてみると、人びとの目や、動きを気にしながら、人びとの考えで、動き、話している自分を発見するのだ。そして、ぼつかりと自分の中が、からっぽになってしまっているのに、ぞつとする。

いつになったら、このからっぽな中に、おれ独自の考えが、ぎつしりとつまるのだろうか。人びとの動きを、人びとの考えを、鋭く見ぬき、分析し、自分のものにできないのは、自分になにもないからなのだ。からっぽには人のまねはできても、自分のものを生み出すものはないのだ。

おれは一生何も確証を握ることなく、送ってしまうのだろうか。

どんなにちっぽけなものでもいい。おれがおれの一生の中で、確かに握ったというものを、おれはどうしてもほしい。そして、それを確かめてみたいのだ。

「垢」につづいて、「教育文化」に連載されたものが、次々と単行本として世に出されていった。

初期のころのものをいくつかあげてみる。

- ・「家庭学習のために―生活の知恵」(28号〜51号) (山本正次)
- ・「あるサークルとゼミの歴史」(56号〜107号) (中村敏弘)
- ・「子どもの詩はうったえる」(45号〜67号) 須藤克三
- ・「親馬鹿教育論」(69号〜93号) (ささきみちお)

10 おわりに

お互いがほとんど知り合うことのないところで、それぞれが子どものためによりよい仕事をしようという力を尽くしている。その交流をもつことができれば、よりよい仕事になっていくだろう。

菊池が願う高みまでいくことはなくても、「教育文化」は、小さい薄っぺらな本でも、半世紀近く、人をつなぎ、子どものための仕事をつなぎつづけた。「教育文化」を「遺産」と位置づけるのはとんでもないまちがいであると多くの宮城の教師に思われるかもしれない。しかし「カマラード」が何度も立ち上がったように、第2次「教育文化」として、互いをつなぐ役割を担うために再び姿を現すことを期待する。

(菊池鮮さん宅を伺った時の話はスペースの都合で十分に生かせませんでした。文責は春日辰夫にあります)

